花　遊　酒

令和の二年 ときは春 古呂奈とかなむ はやり病にて なべて世のなかのひとびと いと暗き心地して暮らしをり　はやり病なれば 三つの断密とて 人の集どひを禁じ いと近くに人と在るを避け 閉ざしたる房に すまじきとのことなり　また 無闇に外に出でて あてどもなく 町を歩き廻はることども 禁ずとてあれば ひとびと せむかたなく ときをやるのみなる　　よしやあしやは　ひとのこころに依りて さまざまなれども おほかたは 其の命に したがひにけり

一六の日 光のどけきけはひに あるをとこ　こころ趣くまゝに 庭にいでて 花を愛で　またこむ春の はなむけにせむとて 僅かなる酒肴を しだれる桜のもとに もていだせり

しだれる桜 あるひは濃きいろに こなたの桜はやや白く あなたの桜はうすももいろに　咲きて 花の間に ふきゆく風に 戯れ遊ぶ鳥の音の 砕けたるさま まさに春の宮のごとし　かくうちながめ　またうち呑みて　ときを忘れば　はや夕ぐれどきとなりにけり

惜しめども春のかぎりのけふの日の　夕暮れにさへなりにけるかな　伊勢物語